

---

# ゼ・・・ゼロ？！

FrangBeat

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼ・・・ゼロ?!

### 【Nコード】

N1573Z

### 【作者名】

Frangbeat

### 【あらすじ】

ルイズは使い魔の平賀才人の故郷”東京”へとやってくる。  
そこで繰り広げられる、闘いを描く。

## 「ロード・ゼロ」

「や、やめてくれ!!!」

「あんなたち愚民どもが、私を襲おうとするなんて。無礼にもほどがあるわ!!!」

長い桃色のブロンドと鳶色の目をした女の子は男に向かってそう言い放った。

「てめえ、何もんだよ???!」

「私の名前は、ルイズ!!!ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ!!!覚えておきなさい!!!」

「何?!ヴァリエール家の三女?!ってことは!!!ゼロのルイズか!!!???」

「(カチン)誰がゼロよお!!!誰が!!!(怒)」

ルイズと名乗る、その少女は杖を取り出し呪文を唱えた。

次の瞬間。

ドカーン!!!

あたり一帯が黒こげになった。

「だから、やめろって言ったのに……」

パタン。男は倒れた。

「ふん！！私に襲い掛かってきた罰よ！！」

## First travel

「おい、ルイズ!!起きろって!!」

誰かが、私を起こしてる・・・誰・・・?

「ルイズ!!!」

ああ・・・才人が・・・

「おはよう・・・才人・・・」

「やっと起きたか。遅いぞ。」

「才人・・・キスして。」

ルイズは寝ぼけ眼で才人に言った。

「え?!」

当然、才人は驚く。

「じゃないと起きない。」

「・・・わかったよ。」

才人は優しく、ルイズの唇に自分の唇を当てた。

「うん!これで起きられる!おはよ!才人!!」

以前のルイズなら考えられなかったが、ルイズは自分の気持ちに正直になり、才人に「好き」だと告白した。

「ったく・・・えらい変わりようだよな・・・」

未だに才人の左手にはガンダールヴの印が刻まれている。

「だつてえく・・・一緒にいる時間が長ければそうなるわよ!..!」

「はあ・・・ほら、行くぞ。」

「うん!..!」

(しかし、このルイズの変わりよう・・・悪くはないが・・・慣れないな・・・)

「で、どこに行くの??」

「アンリエッタ王女のところ。昨日、連絡がきてさ。あしたどうしても頼みたいことがあるとかで。」

「そうか・・・(アンリエッタ王女・・・まだ才人のこと狙ってるのかな・・・不安・・・)」

「失礼します。」

「あ、才人さん。」

「アンリエッタ王女。早速ですが、頼みたいことは?」

「ふふふ。頼みたいことはこれです。」

アンリエッタは才人とルイズに一枚の地図を渡した。

見た瞬間才人の目つきが変わった。

「王女!!これは!!!!」

「はい。才さんの故郷”トウキヨウ”の地図です。秘密経路で入手しました。」

「これから、竜の羽衣に乗ってこのトウキヨウに行ってもらいます。」

「え……?才人……帰っちゃうの……??」

「なんでまた??」

詳しい話は1時間にも及んだ。

その話を聞き、才人は了承した。

「あ、言い忘れてましたが。ルイズ。あなたも行くのですよ。」

「え?……王女!!ありがとうございます!!!!」

「出発は明日です。では。」

二人は王家を後にした。

「東京か〜・・・懐かしいな〜・・・」

「ねえ・・・才人・・・」

「ん???どうした?」

「明日は早いし、もう寝ようよ〜。」

「そうだな。寝るか。」

つい癖でいつもの草布団へ。

「あ、才人。こっちこっち。」

自分の寝ている布団へ手招きするルイズ。

「あ、そうだった。」

才人は布団に入って眠りに・・・

ギユ・・・ん?暖かい・・・

ルイズが抱き着いていた。

「ル、ルイズ!!!お前!」

「ええ〜・・・ダメ〜・・・???」

その顔はとても可愛く、抱きしめたくなるような顔だった。

「わかったよ。ルイズ。」

「やった！おやすみ才人お・・・」

「おやすみ・・・」  
「チュ・・・」

唇に唇を重ねた。

・翌日・

「さて、出発するとすつか！！！」

「うん！！！」

部屋を出て、竜の羽衣（ゼロ戦）のところへと向かう。

そこにはすでにコルベール先生や学院の生徒たちが大勢あつまっていた。

生徒たちは言葉言葉に「気を付けてな！！」「トウキョウのお土産よろしくな！！」「さびしかったら戻ってこい！！」といていた。

そんな言葉がルイズの心にしみた。

「また帰ってこれるのにな・・・」

「ああ・・・」

「さて、もう出発しようか。操縦方法はわかるね？才人君。」

「はい。忘れたんですか？俺は”神の左手ガンダールヴ”ですよ？」

「ははは！…！そうだったな！…」

竜の羽衣はプロペラを回し、その機体を空へと飛び立たせた。

## Second travel(前書き)

この回でオリジナルキャラが登場します。原作にはないですがご了承ください。



「あ、大丈夫です。すいません。では。」

「えっと……どこから来たんですか？こんな日本軍が使っていたゼロ戦に乗って。」

「あ、ハルケギニアからよ!!!悪い?」

「ハルケギニア??何それ?ゲームのやりすぎじゃない?」

「え?あ!!!」

「そつか……ここはもう東京なんだ……」

「いえ!なんでもありません!行くぞルイズ!!!」

「う、うん……」

「一体なんだっただん?」

「……」

「この東京に来た目的は……あれ?」

「なあ……ルイズ……俺たちなんでここに来たんだっけ?」

「え?あ、王女にきいてこなかったね……」

「地図を渡されたが……特に何も……?」

「これって・・・」

地図には明らかに×印が書いてあった。

・ここがさす場所・・・それは・・・

「秋葉原か！！！」

二人は秋葉原に向かった。

「ここだ！！！」

指差した先には「メイドカフェ」。

「め、めいどかふえ・・・??」

「ああ。シエスタみたいなのが、お客様にサービスをすることだ。」

「ふうくん・・・」

ルイズはあまり興味がなさそうだ。

「あ、ここの前によりたいところあるんだけどいいか??」

「うん！」

才人が向かった先・・・それは・・・

「ただいま！！母さん！！！」

「あら、才人。遅かったわね。」

「え？まあね。」

「そういえば、パソコン直してきたんでしょ??」

「……パソコン??あ、そうか……俺パソコン直しに行ってそれからハルケギニアのルイズのところに召喚されて……」

「才人??」

ルイズがひよこつと顔をだす。

「あら。その女の子は誰??」

「あ、いや……この子は……」

「パソコン直しに行つて30分もしないうちに女の子ナンパするなんて。」

「30分?!」

・才人はここで気が付いた。ハルケギニアで過ごした長い歳月は元の世界では30分程度だということ。・

「私は、ル……」

口をふさがれた。

(何……?才人?)

(ここでは外国の名前になるんだ。だから、別名を使う。)

(うーん・・・わかった！)

「この子は、東瑠唯好(あずま・るいず)。迷子になっちゃったらしいんだ。」

(東瑠唯好??)

(悪い!!とっさにこの名前が出てきちゃった!!)

(まあ、いいけど。)

「可愛いなまえね〜。」

「あ、ありがとうノノノノノ」

「じゃ、じゃあ母さん。俺また出かけてくるから。」

とその場を抜けることにした。

「はい。行ってらっしゃい〜。あ、瑠唯好ちゃんに変なことしたらダメよ〜」

と茶化す母。

「わかってる!?!」

ボタン!!勢いよくドアが閉まった。

「とりあえず。また目的の場所に行くぞ。」

「うん!!」

二人はまた秋葉原へ向かった。

Third travel 秋葉原へ

「よしついた。」

才人とルイズは秋葉原についた。

再びあのメイドカフェへ向かう。

「いらつしゃいませ！！ご主人様！！？」

たくさんの可愛いメイドさんが迎えてきた。

だが今の才人にそんなもの眼中にはなかった。

「あの。ここに謎の箱とかありませんか？？」

「あゝ。それでしたらこちらです。」

アキさんと名札に書いてある、メイドさんに案内されたのは薄暗い部屋だった。

「このメイドカフェができてからずっと置いてあります。」

そこには見るからに怪しい”箱”が置いてあった。

「開けるか・・・」

恐る恐る開けた。

「あれ??開かない・・・」

「え??なら!!」

ルイズは杖を取り出し呪文を・・・

「あれ??・・・魔法が使えない・・・」

「そうか!!!ここはハルケギニアじゃない!!だからか・・・」

「そんなあゝ・・・」

「王女からもらったのってその地図だけ??」

「ん?ああ・・・これもらったよ。」

1つの釘抜きをもらっていた。

「これで開くのかな??」

(ってかなんで王女これ持ってんだ・・・)

ガッ!!!

「あかない・・・」

「仕方ない・・・また出直そう。」

二人はメイドカフェを後にした。

それから2時間弱歩き、向かった先は、ゼロ戦が落ちたあの野原。  
そこには家があった。

「あんな所に家があるのか。」

トントン。

ノックを試してみた。

「はい?」

出てきたのはあの人だった。

・「えつと・・・どこから来たんですか?こんな日本軍が使っていたゼロ戦に乗って。」

と言っていたあの人。

「ああ・・・こないだの。」

「すみません。こんな所に家があるの珍しくて。」

「いや。いいよ。あ、僕は佐々木遊戯。」

「さ、佐々木?!」

「あ、ああ・・・それがどうかしたか??」

「佐々木ってまさか・・・佐々木武雄海軍少尉か・・・??」

「あゝ・・・それは確か曾曾おじいちゃんの名前だな。」

「じゃあ、このゼロ戦を作ったのはあなたの曾曾おじいちゃん？？」  
「！！」

「作ったんじゃないくて、使ってたのは知ってるけど・・・」

「でも途中で行方不明になったらいいんだよね・・・ゼロ戦と一緒に。」

「そうか。それでハルケギニアにきたのか。」

「すまない！！協力してほしいことがあるんだ！！」

「なんだい??」

「一緒に来てくれ！！！！」

才人は遊戯に謎の箱を開けてもらう手伝いをしてほしいと頼んだ。

再び秋葉原へ。

Fourth travel 再・秋葉原へ

「ここだ。」

才人とルイズ、そして遊戯はあのメイドカフェについた。

メイドさんに事情を説明し、奥に入れてもらった。

「さて、取り掛かるか。」

遊戯はさっそく作業に入った。

・・・といっても鍵を開けるだけだけどね（笑）

ガチャ

箱の鍵が開いた。

「じゃあ・・・開けるぞ・・・？」

箱の中身をみて3人は驚愕した。

「こ、これは！！！」

そう。セーラー服だった。

「な、なぜ・・・??？」

「才人・・・これなに??？」

「ああ……これはセーラー服と言ってこの世界の女子高校生が着ていた服だよ。」

「ふうくん……」

「アンリエッタ王女はこれを持ち帰らせるために俺たちをここに戻したのか?？」

「……………」

「「はあ……………」」

ルイズと才人は2人同時にため息をついた。

「遊戯……………ゼロ戦出してくれ。」

「あ、ああ……………」

仕方なく才人はセーラー服を持ち出してゼロ戦に乗り、ハルケギニアに飛んだ。

滞在時間。わずか5時間弱。

「セーラー服を持ち帰るためにこんなに疲れるとは……………」

「本当ね……………」

こうしてすぐぐく短い逆召喚は終わりを告げた。

……………かに思われた。

「ふふふ・・・そうか・・・あの二人が平賀才人とヴァリーエルの三女、ルイズか。いずれまた会うことになる・・・」

佐々木遊戯は不敵な笑みを浮かべた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1573z/>

---

ぜ・・・ゼロ?!

2011年12月10日16時54分発行